

秋の特集

弥富文学碑巡り

秋が訪れ、過ごしやすい時季となりました。弥富市内には、地元をはじめとする著名な作者が残した俳句や短歌を伝える数多くの碑が点在しています。今回はその中から、見学しやすいもの、あまり文学に触れたことのない方でも内容を理解しやすいものをいくつか選び特集します。実りの時季を迎えた田畑の中で、弥富の文化に触れてみませんか。



- ①作者 ②所在地 ③句・歌

参考文献：弥富文学研究会(2000)『やとみ文学散歩』
 文学碑は自由に見学できますが、解説をご希望の方には弥富ふるさとガイドがご案内します。
 ▼申し込み・問い合わせ先
 歴史民俗資料館 ☎65-4355

5

一面に広がる金魚田の中に家が点在する、少し前の弥富の風景を詠んだ句です。金魚養殖で生きる農村の暮らしがよく表れています。

①山口誓子
②平島町西新田(おみよし松)
③金魚田の中に人住む家があり

6

森津の藤の一番美しい時季を詠んだ句です。この地に佇む武田邸の門をくぐれば広がる、紫雲のごとき藤棚の香気と静かな美しさをよくとらえた一見さり気ないようで、鋭い美的感覚を感じさせる佳句です。

①澤田緑生
②森津14-607(森津の藤)
③長屋門潜れば藤の風にほふ

7

伊良湖(田原市)出身で漁夫歌人として知られた作者が詠んだ歌です。各地を巡りながら多くの歌を残した作者が、松名新田の佐野家を訪れた1844年頃、当時有名であった松名の大松を詠んだ歌です。

①糟谷磯丸 ②松名(筏川旧堤防沿い)
③いかばかり年をつむら名にしおふまつなの里の松のこたかさ

8

医師として伊勢湾台風被災地の巡回診療に訪れ詠んだ句です。浸水した土地を舟で行くと、水の下には稲穂がざっしり実りを迎えていました。風になびくように、水の流れることによってその穂が一斉に動く光景を詠んでいます。

①村上冬燕
②西末広1(殉難の塔)
③洪水の底にて稲穂靡(なび)くかたち

1

田植え機などない時代、苦勞して苗を植え終わると農上がり(野上り)を迎えます。人々は誘い合い神社に詣で今年の田植えが無事終わったことを感謝し喜び合いました。佐古木の村に住み農村をこよなく愛した作者なればこそ田に根付いた苗を「田に力出て」と詠んだのでしょう。

①加藤不倒
②東中地二丁目56(白鳥コミュニティーセンター入口付近)
③田に力出て野上りの神事あり

2

かつて見られた農村の風物詩でもある火振りと呼ばれる漁の様子を詠んだ歌です。水を張った夜間の水田にガスランプを持っていき、その明かりで魚を捕まえるというもので、水郷地帯の海部地方ならではの光景だったことでしょう。

①前田進
②鯛浦町上本田95-1(総合福祉センター)
③あかあかと水田にあかり映れるは梅雨の雨間に鯰とるらし

3

大地主の奥方として服部家に嫁いだ作者が自らの人生を振り返り、あつと言う間に過ぎ去った年月の短さを詠んだ句です。写真右側の歌碑は服部家に仕えていた平野しもによるもので、亡くなった後、作者がその回向のため建てたものです。

①服部紫英
②鯛浦町上六49(薬師寺)
③うたた寝の六十年やかかりの夢

4

昭和61年に作者がこの地を訪れ詠んだ句です。せり市の木舟の中をぐるぐる回る金魚を見て、群れて回り続ける金魚の哀れな宿命にまで思いを馳せ、詠んだ句ではないでしょうか。

①山口誓子
②前ヶ須町野方(総合社会教育センター近く)
③群金魚曲流なして槽廻る